子ども時代と私(6)

手作りのぬくもり

千羽喜代子

今、手許に北九州市門司区の地図を置いている。小倉の友人に依頼して郵送していただいたものである。門司は昭和六年から十六年（小学校四年生）まで生活した処であるが、私が生活した頃に比べると現在は大変な変りようである。無理もない、半世紀以上経過しているのであるから。関門国道トンネルの開通に帰因していることも否めない。私が生活していた頃の門司は現在の旧門司にあたる。

昭和十六年頃までの私の記憶に残っている門司市をまず紹介しよう。

対岸は下関である。和布利（めかり）神社（現、関門トンネル入道口）の対岸の壇之浦は、泳いでも渡れるくらいの短距離にあって（もっとも潮の流れが速いので泳いで渡るのは容易ではない）、人の往来が肉眼で見えた。

海洋性気候の地であり、タイやフグをはじめとして新鮮な魚貝類が豊富で、朝の魚市場の熱気は子ども心にも躍動をおぼえた。目の前でフグを料理する包丁のさばきに、しばし見とれたこともあった。

当時の門司港は、釜山との連絡船や大連にむけての航路、石炭船などが寄航し、何と活気に満ちていたことか。中でも子ども心に興味をいだいたのは威勢のよいバナナのたたき売り、店に高く盛られた赤ちゃんの頭ほどの大きさのザボン、特にバナナのたたき売りの前で、これまた釘づけになったものであった。しかし残念ながらバナナは当時の私の口には入らなかった。入ってもせいぜい半分か三分の一であった。子どもは病気にかかるという理由で。

昭和十二年頃から戦時色がちらつき（日中戦争勃発）、門司を中継場所にしていたのであろう、各家庭に二、三人ずつの兵隊が何日か滞在し、家庭料理の接待に母や祖母たちが汗を流し、子どもたちもお国のために手伝ったのであった。子どもとの遊びの上手な人もいた。

以上、どのような生活背景のもとで子ども時代を過ごしたか、その一端を紹介したのであるが、幼稚園時代は肋膜炎を患い、家庭内での生活をよぎなくされた反動からか、小学校（当時は尋常小学校）に入学してからは勉強したという記憶よりも、放課後は専ら屋内・屋外を問わず、近隣の子どもたちとの遊びで一日が暮れた。家の周囲は住宅街で広場という広場はなく、坂の多い処（一坂町）であったが、カクレンボ、石けり、ゴム跳びなどをしていると、不思議にどこからと

もなく子どもたちが寄ってきた。

小学校の生活は、朝礼時に校長先生が白い手袋をはめて、奉安殿から恭々しく出してこられた教育勅語の拝読から始まるのであるが、習慣化されていた。最大の楽しみは放課後の学校の裏山である。タイコ橋の下の急斜面は格好のスベリ台で、お尻をつきながらクラスメイトの数人とスリルを楽しむ。どうやったら手をつかないで滑れるか、何回も操り返す。すでに他の子どもたちの遊び場になっているので土がツルツルで、光っている。椿の花が咲く頃、その実の落ちる頃、野イチゴが適する頃、ジュジュ玉のできる頃など、森の何処に、いつ頃、何があるかを熟知していて、それらをお手玉の豆の中に加えたり、首輪を作ったり、密を舐めたり、勲章にしたりなど、お互いに教え合い、教わり合う。下校の合図で蜘蛛の子を散らすように家路につく。

休日は専ら徒歩で、家族たちと、友だちも一緒に、また時には近所の大人たちとも一緒に、和布利公園方面、田野浦方面、また丸山を通り、その先のトンネルを通って貴布方面に遠足に行く。山から流れ出る清水をすくい、イナゴを追い、カキを海水で洗って口に入れるなど、郊外の自然環境で遊ぶ。このように想いおこしている今現在、ふっと気付いたことは、両親は私の体力づくりを願っての郊外活動ではなかったかということである。小学校三年生頃の写真を見ると、上肢・下肢ともに細く、しかも色黒であるところから、まさにゴボウのような身体つきであった。そのためかクラスにほぼ一人の給食補給者の中に入っていた。この頃、虚弱児だけを別室に集めて給食の補給をしており、その対象児に該当していたのである。

今頃になって知る親の恩である。書棚に置かれていた『母心(友松圓締著)』がなつかしい。

昭和十六年秋、父親の転勤で上京、当時は郊外であった西武新宿線の沿線に住んだが、小学校六年生の

夏期休暇を利用して、一週間にわたって有志のみのキャンプを同じ沿線の久米川で行った。当時の久米川は武蔵野の雑木林の連なる豊かな自然環境で、そこでのテント生活である。引率者は六年生の担任に男性の先生が何人か加わっていたが、現今の学校教育では考えられない計画である。テントの張り方がまずかったため夜中の雨で床まで雨水が侵入するというアクシデント。三十～五十人くらいの六年生の男女児が五～六人ずつのグループに別れての無言劇の上演（もちろん男女別々）、いかに自然環境を上手に利用するかと智慧を出し合った。一週間であっても、はじめて親から離れて共同生活をした体験は、この頃の子どもたちにとっては修学旅行以上の喜びであり、また慰めでもあった。三度の食事は自炊であったと思うが、それほど負担に感じなかったのか、記憶していない。写真も写していない。

このキャンプは、待望の修学旅行が中止になってしまったことによる恩師たちの思いやりであったらしい。

遊びということで思い出すのは、人形づくりとそれを使っての人形遊びである。親に書物や文房具を求めても玩具を買い求めた記憶が薄い。そろそろ節約の時代に入っていたのであろう。遊びに使用する道具の多くは手作りであった。お手玉は布で三通りの型を作り、採ってきたジュジュ玉などを加えて縫い上げた袋につめる。それを学校の休み時間を待ちうけて取り出し、友だちと自己目標を定めて競い合う。同様に、着せ換え人形の洋服や着物を、縫い物をしている母親の側で作る。一時は布で人形を作ったこともあった。友だちのおばあさんに笑われても、それは自分の作った宝物であるから立派なものである。紙の着せ換えよりも布で作った着せ換えの方が本物に近い。着物はオクミまでついている、本物のミニ版であった。

母親がことさらに女の子としての教育を意図してい

たとは思えないが、我が子の要求を受け入れていたのであろう。母親から叱られた記憶はない、おだやかな人であった。

作った人形や衣服は早速に人形ごっこに使用した。空き箱を幾つもかかえて、翌日は友だちの家に移動する。弟妹の世話の依頼に自責の念をおぼえながらも。童話の中のお姫様を登場させ、童話の世界を人形ごっこの中で再現することもあった。自分がその主人公になったつもりになって。

昭和十六年頃、地域に「子ども会」が誕生した。発起人は近所の青年（男性）であったと思うが、風呂屋

を集会場にして第一回の発会式がもたれた。子ども会が誕生した経緯はわからないが、その後、地域の道路の掃除などに参加した。竹ひごとローソクの炎で模型飛行機を作り、飛ばないので苦労したこともあった。この子ども会がどのように発展したかは、その後上京してしまったので定かでないが、発足時の写真が新聞（地方版）に掲載された。子どもの地域社会教育活動の始まりであったとも聞く。

私の児童期は、太平洋戦争勃発以前の決して物の豊かな時代ではなかったが、平凡な生活の中での親とのふれあいや環境の中に〝ぬくもり〟という情感がただよっており、それが生活にうるおいを与えていた。引き続く戦争・空襲・疎開・終戦という、かつてない激動の中で思春期・青年期を送るのである。

（大妻女子大学）